

## 第12回夏期特別集会

## 放蕩息子

## ――ルカ伝第15章1～32節――

1965年7月30日

小池辰雄

聖書の中に体当たり 極限的な言葉 キリストの愛は万人救済 私たちの絶対性 永遠の場  
 失せたる一匹のために 体読体受 このとき我に反りて 絶対依存者 父とキリストの姿 無  
 条件に迎えられる この我が子 絶対的な行き詰まり キリストの砕け ○△□× 円現

## 【ルカ15・1～32】

1 取税人・罪人等みな御言を聴かんとて近寄りたれば、2 パリサイ人・学者ら  
 ら<sup>つふや</sup>呟きて言う、『この人は罪人を迎えて食を共にす』

3 イエス之に譬を語りて言い給う、4 なんじらの中たれか百匹の羊を有<sup>もち</sup>たんに、  
 若しその一匹を失わば、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出<sup>みいだ</sup>  
 すまでは尋ねざらんや。5 遂に見出せば、喜びて之を己が肩にかけ、6 家に帰  
 りて其の友と隣人<sup>となりびと</sup>とを呼び集めて言わん「我とともに喜び、失せたる我が羊  
 を見出せり」7 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改<sup>かへ</sup>むる一人の罪人のためには、  
 悔改めの必要なき九十九人の正しき者にも勝<sup>まさ</sup>りて、天に歡喜あるべし。

8 又いづれの女が銀貨十枚を有<sup>もち</sup>たんに、若しその一枚を失わば、灯火<sup>ともしび</sup>をと  
 もし、家を掃きて見出すまでは懇<sup>ねんじ</sup>ろに尋ねざらんや。9 遂に見出さば、其の  
 友と隣人とを呼び集めて言わん、「我とともに喜び、わが失いたる銀貨を見出  
 せり」10 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改<sup>かへ</sup>むる一人の罪人のために、神の使  
 たちの前に歡喜<sup>よろこび</sup>あるべし』

11 また言いたもう『或人<sup>あるひと</sup>に二人の息子あり、12 おとうと父に言う「父よ、財  
 産のうち我が受くべき分を我にあたえよ」父その身代<sup>しんだい</sup>を二人に分けあたう。  
 13 幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠国にゆき、其処にて放  
 蕩にその財産を散らせり。14 ことごとく費したる後、その国に大なる飢饉<sup>よりすが</sup>お  
 こり、自ら乏しくなり始めたれば、15 往きて其の地の或人に依<sup>より</sup>附<sup>すが</sup>りしに、其  
 の人かれを畑<sup>つか</sup>に遣<sup>つか</sup>わして豚を飼わしむ。16 かれ豚の食<sup>く</sup>らう蝗豆<sup>いなしまめ</sup>にて、己が腹<sup>み</sup>  
 を充<sup>み</sup>たさんと思<sup>おも</sup>う程なれど何をも与<sup>あた</sup>うる人なかりき。17 此のとき我に反<sup>かへ</sup>りて  
 言う「わが父の許<sup>もと</sup>には食物あまれる雇人<sup>やとこびと</sup>いくばくぞや、然るに我は飢えてこ  
 の処に死なんとす。18 起<sup>た</sup>ちて我が父にゆき「父よ、われは天に対し、また汝



の前に罪を犯したり。19 今より汝の子と称えらるるに相応しからず、雇人の一人のごとく為し給え」と言わん」20 乃ち起ちて其の父のもとに往く。なお遠く隔たりたるに、父これを見て憫み、走りゆき、其の頸を抱きて接吻せり。21 子、父にいう「父よ、我は天に對し又なんじの前に罪を犯したり。今より汝の子と称えらるるに相応しからず」22 然れど父、僕どもに言う「とくとく最上の衣を持ち来りて之に著せ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋をはかせよ。23 また肥えたる犢を牽きたりて屠れ、我ら食して楽しまん。24 この我が子、死にてまた生き、失せて復得られたり」斯て、かれら楽しみ始む。25 然るに其の兄、畑にありしが、帰りて家に近づきたるとき、音楽と舞踏との音を聞き、26 僕の一人を呼びてその何事なるかを問う。27 答えて言う「なんじの兄弟、帰りたり、その恙なきを迎えたれば、汝の父、肥えたる犢を屠れるなり」28 兄、怒りて内に入ることを好まざりしかば、父いでて勧めしに、29 答えて父に言う「視よ、我は幾歳も、なんじに仕えて、未だ汝の命令に背きし事なきに、我には小山羊一匹だに与えて友と楽しましめし事なし。30 然るに遊女らと共に、汝の身代を食い尽くしたる此の汝の子、帰り来れば、之がために肥えたる犢を屠れり」31 父いう「子よ、なんじは常に我とともに在り、わが物は皆なんじの物なり。32 然れど此の汝の兄弟は死にて復生き、失せて復得られたれば、我らの楽しみ喜ぶは当然なり」』

### ●聖書の中に体当たり

聖書は「分かつた」ということでは、いくら分かつていくら暗記しても、決して聖書の世界には入れない。これはその中に体当たりです。日に新たにより深く入ることの他の何ものでもない。「これでいい」というところは一つもない。また、決して繰り返してはいない。古くして常に新たなるもの、変わらせずして常に展開していくもの、これが聖書の真理です。「放蕩息子」の前に、「失せたる羊」と「失つた銀貨」の話があります。そこから先ず読んでいきます。ルカ伝15章1節から7節。

1 取税人・罪人等みな御言を聴かんとして近寄りたれば、2 パリサイ人・学者ら呟きて言う、『この人は罪人を迎えて食を共にす』

いろんな種類の人がそこにいるわけです。「取税人・罪人」と「パリサイ人・学者」というものが対照をなしている。そういった対照をなすような二つの種類の人たちがそこにいますので、キリストの譬話はまさにピタリなんです。律法のことをわきまえないで勝手な世俗な歩き方をしている者を「罪びと」といいます。神の聖者とも言われるような人がこういった人間のくずのような者を相手にしているというので、「呟く」という。

この呟きの心がもう非常な毒素である。呟きとか妬みとかいうものは毒素である。私は『福



音の心臓』(曠愛新書第3号)の中にそのことを書いておきました。こういう心が動きだすと、もうその人は福音からは遠くなる。どんなに聖書を勉強しましても、あるいは知っていても、聖書やキリストのキの字も知らないような人よりもなお地獄に入る。聖書を知っているとか知らないとか、それによって天国に入るとか入らないとか、そんなことではない。この「眩き」という毒素はいかん。「パリサイ人・学者」というのは、モーセの律法を実行しているところの立派な人です。この「パリサイ」というのは「選び分かれたる者」、エリートという意味ですから。「学者」とは律法に詳しい人です。これは道徳的宗教的特権階級です。ところが、それが眩く。

イエスという方は道徳的特権階級でも、宗教的特権階級でもない。彼は凡人である。イエスというひとは、いかなる範疇にも入らない凡人である。「イエス」といえば、宗教的天才とすぐ思ってしまう。「神の子」とすぐ思ってしまうでしょうけれども、

「何者でもない」

というんです、イエスというひとは。まずこのことから始まらないと、福音は分からない。

### ● 極限的な言葉

『この人は罪人を迎えて食を共にす』

3 イエス之に譬を語りて言い給う、

キリストは、

「また彼らはいい変わらさずくだらないことを考えている」

というわけだね。

4 なんじらの中たれか百匹の羊を有たんに、若しその一匹を失わば、九十九

匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。5 遂に見出

せば、喜びて之を己が肩にかけ、6 家に帰りて其の友と隣人とを呼び集めて

言わん「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」

素晴らしい言葉です。もうこの中に福音の質がちゃんと入っている。ちゃんと盛られています。キリストの言はいかなる神学的表現よりも、その誰にも分かる単純な言葉の中に無限な味が含まれている。これが本当の真理の世界です。小学校の生徒が読んでも分かる。また、大学者が読んでも分からない。こういう不思議なものです。

どうか、皆さんは——新しい方もいらつしやるので、申し上げますが——聖書を分かるうとして、いわゆる「分かるう」としてかかつて、学校で何かものを学ぶような気持でこれにかかったら、いつまでたってもご苦労さんな話で、本当に入れない。これは、さつきからそこらでキヤアキヤア言っている子どもたち、ああいう単純な魂にならないと、この世界には入れない。これはキリストが言われた。弟子たちが幼子を排斥しようとしたら、キリストが叱った。



「この幼子<sup>おさなご</sup>たちのようにならなければ天国には入れない」と。単純になることが難しいという、妙なことになっているわけです。今の若い方で、学問をなさればなさるほど、それはある意味において福音に入りにくいですから、そんな学問が鼻にかかるようなことがないように。

「百匹の羊を有<sup>も</sup>たんに、若<sup>も</sup>しその一匹を失わば」

と、キリストの言葉は非常に極限的な言葉です。極限概念といえますか。その表現が極限的な、常識を一喝<sup>かっ</sup>したような表現をなさる。誰かその言葉に堪え得んやというのがキリストの言葉です。ちつとも水を割らないで仰る。九十九匹あつたら、まあ、一匹くらいどうなつたつていいじゃないかと、そんなわけではない。

### ●キリストの愛は万人救済

私は今日こちらへおうかがいする時にバスの中で、Mさんがこちらへ来がけに転んで傷めてついに来れなかったことを聞いて、私は胸が痛かった。あの人は皆さんの中で身体が一番弱い方です。どうしても来たいと願っておられたその方が来れなくなつた。正に、皆さん百人のうち一人のMさんが欠けた。私は本当に申し訳ない。そこへ戻つて行つて、何とかして連れて来るといふ——キリストのこの譬話では、

「その一匹を失わば、九十九匹を野におきて」

という——他はバスの中に残して、お前は戻つて、それを肩に背負つて連れてくるという、これがこの譬話<sup>たとえばなし</sup>です。私はこの譬話を今日語る資格がない。

キリストの愛というものは、万人救済である。一人も欠けずに天国にいれたい。私は今度の曠愛新書第3号のところに図を書きましたね。あの三角形は合同の三角形です。ただの相似形ではない。これは合同なんです。即ち、これは悪の幕屋であるこの世です。この世の中に教会もあれば、いろいろあります。けれども、この全体は、聖書が言うところの悪の幕屋である。ただキリストだけがこの悪の幕屋を支えている。この十字の印がそのシンボルです。これが逆に上にひっくり返している。この悪の幕屋が全部——これはパラダイスと書いてある——これが全部、天国に化することがキリストの本願である。しかも、この中のものはみなこの十字架の一点を通つて行く。どこの人もみなこの十字架の一点を通つて入つていく。これはそういう抽象ですよ、絵でいえば。この抽象の図をご覧になって、そこをぐつと瞑想していただかないと。

人ひとりの失われることも神は望み給わない。それで、「忍耐をもつて待つている」と、ペテロ書でペテロが書いています。

「神の国の来たるのが遅いのは、神さまが忍耐をもつて待つておられる。すべての人が救いに来るために」

と。「あいつは悪人だから」というわけです。死刑囚であつても——「あつても」ではない



——そのような人が逆にもの凄く天国に入る。事実、死刑囚であった十字架上の片一方の盗賊は——これは譬話ではない。事実ですよ——片一方の盗賊は、

「私は生涯、マイナス99みたいな男です。せめても、あなたが御国にいらつしやる時に、

または、「来らせ給う時に」と書いてある。

私を覚えてください」

と言って、キリストによりすがった。この

「せめても、私を覚えてください」

という、この砕けた一つの告白が、この1がマイナス99を棒引きにしまして、このキリストの十字架を通つてまっ先にこの盗賊は、死刑囚は天界に入つて行つた。これがやはり今日の話に関連するところの砕ける魂の事態です。砕けざる魂は天国に入れない。これははつきり言います。どんなにそれが偉そうで、また人には立派そうで称賛されましようとも、

「俺こそは天国に入れる」

と言って大手をふつて行こうとすると、この関門で

「ちよつと待てー」

と言われる。これは誰も知らん。誰が天界に行くかは誰か知らんやです。

ただ一個の存在をも惜しむ。個体の価値ということが、迷える羊のところにも書いてありますが、万人救済です。個体の価値、一個の人間の魂の価値は全世界とも代えることができない。これは論理にならないですよ。論理にならないところに、そこに真理が、この生命の真理がある。どの一つの魂をとつてきても、全世界と——重みを比べてみると——一個の方が重いというんだ、キリストは。九十九匹よりもこの一匹の方が重いというようなわけです。

### ● 私たちの絶対性

私たちは、そのように絶対的なものとして顧みられている。ということは、絶対者が私たちを顧みておられるということが、即ち私たちの絶対性なんです。我々がただ手放しに絶対性を持っているのではない。神さまとの連関において絶対性を持っている。このような厳かなことは、仏教の世界ではないです。とかく

「キリストの神学は幼稚だ」

とかいうようなお話も聞きますけれども、冗談言つてはいかん。その神話的な、あるいはそのような矛盾したような表現をしているところの中に、いかにもの凄い測りしれないところの真理が隠されているか。皆さんはどのような思想にぶつかつても、どのような宗教にぶつかりましても、厳として一歩も退くようなことがあつてはいかん。それは、この福



音を本当につかんでいれば、そんなことはない。

私のところには創価学会はやって来ないけれども——来たらいいと思っっているんだ——いくらでも太刀打ちできますよ。この福音の世界はケタが違っんです。どうか、皆さんは、神学教授だとか、いろいろ聖書に詳しい方々の方が自分よりもえらいと思ったり、聖書がより分かっているなんて、そう思ったら大間違いですよ。皆さん一人びとりが神の奥義を極めることができる。それはちゃんとパウロが言っている。ヨハネも言っている。

「何びともこれを教える要なし」

と。私は皆さんに教えているんじゃない。皆さんと共にこの真理の世界を告白しているだけ、共にあずかっているだけです。

本当に御言を御霊をもって把握しているところに、御霊におけるところの、絶対の権威がありますから。その権威は神における、キリストにおける権威であって、自分の権威ではない。だから、その権威を持てば持つほど、その人は本当に魂が砕けている。本当に魂が砕けていなければ、本当の権威は来ない。これは絶対のマイナスと絶対のプラスが同じことになる。そういうような事態をしつかりと身につけて、どうか、学問があるののないの、聖書がヘブライ語で読めないのギリシア語で読めないのと、そんなことは問題ではない。日本語でたくさんですから。

### ●永遠の場

この集会はたった三日間ですけれども、質的にはこれは無限間ですから。三日間ではない。無限間です。質的には永遠の場ですので、この質的な永遠の場で、皆さんがとにかく——何かをではないですよ——どのような質をつかまえるか。福音の質は、どんなに小さなダイヤモンドでも大きなダイヤモンドでも、ダイヤモンドには変わりがない。この福音の宝は——宝とか、真珠とかあるけれども、真珠であっても、宝であっても何でもい——これは天国なんだから。それがどんなに小さくても、量が問題ではない。質です。

「私はもうとにかく、何かしらんけれども、本ものにつかりました」

と。もうそれでいい。それが原子核的な核爆発を起こして拡大していきますから。どんなにそれが顕微鏡的に、電子顕微鏡的に小さくても大丈夫です、これが本ものなら。いいですか。その本ものだけを、皆さん、この三日間のうちにどこかでハタとつかんで、「そうだ」ということにならなくては。自分というものを本当に、自己突破をしなければダメです。私はこの頃、「突破の神学」なんて言うんだけど。自己突破をする。敵を突破をするんじゃないですよ。

こないだ京都でも、「無条件降伏」「中央突破」「決定的勝利」と題して話しました。そいつにぶつかって、これはと思った幾人かの人たちがその後ずつと来ていらつしやるというから、私は本当に聖名を讃えるわけです。



本当に自己突破をした。誰でもがどんな状態であろうと、そんなことは問題じゃない。どんな性格であろうと。Mさんにかぎらず、まだ私は幾人かの人たちがこちらに来ていた。きたかったけれども、来れない方々がある。それを先程も覚えて祈りました。私は何の隔りもないです、正直。そういつた行き詰まりや苦しみ悩んでいる方々と、皆さんはもし仲たがいでもしていましたならば、ここから下りていけば、本当の握手ができますから。キリストの生命が燃えたらば、いかなることもはや人間の間で問題はないはずですよ。いいですね。それが本当にできなかったならば、それは福音の証者ではないですよ、

「私はこの人たちはどうも困ります」

なんていうのは。キリストは誰かに困ったですか。誰にも困らないんです、キリストは。キリストの霊がきたら、困るわけじゃないですか。どうか、皆さん、そこを無条件に、いかなる条件もなしに突破するところのものをいただいで帰ってください。もう、私がこれだけ言ったって、もう突破している人があると思うんだけど。それがなかったら、福音ではないですよ、「この場合」とか「あの場合」なんて、場合と状況を考えて品分けしていたんじゃない。

食事の時も、どうぞ、いわゆる類が類を呼ぶというような集まり方をしないように。どなたが隣にきましても、

「ああ、本当にようこそ」

と言って、兄弟姉妹の心がかもし開かなかつたら、もうこの集会は解散だ。いいですか。どこでも、私はバスの中でも、みんなと話したかったから、ちよいちよいあちこちとびまわったというようなわけです。そういう突き抜けがなかったら、我々は使徒的信仰なんて、そんな題目は自ら恥じなくてはならん。

### ● 失せたる一匹のために

4 なんじらの中たれか百匹の羊を有たんに、若しその一匹を失わば、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。5 遂に見出せば、喜びて之を己が肩にかけ、6 家に帰りて其の友と隣人とを呼び集めて言わん「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」7 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改めの必要な九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あるべし。

「百匹の羊をもたんに、その一匹を失わば」

と言って、この失せたる一匹のためには、谷底までも行って、これを肩にかついでやって来る。そして、見いだしたら喜んで――自分ばかり喜んでいない――その友と隣人とを呼び集めて、

「ああ、一緒に喜ぼうではないか。この羊を見いだしたから」



「なんだ、お前は一匹の羊なんてで」

と、そういうようなことを言う友だちはダメですよ。しかし、この喜びです。この喜びは本当に沸き立って、もう「コイノニア」なんていうことは言わなくなったって、おの自ずから生じてくるんです、この心があるならば。

また、

8 又いづれの女が銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失わば、灯火をと

もし、家を掃きて見出すまでは懇ろに尋ねざらんや。遂に見出さば、其の

友と隣人と呼び集めて言わん、「我とともに喜び、わが失いたる銀貨を見出

せり」

イエスは何かそういつた実際の例をどこかで見られたんでしよう。そして、そういうことを譬話にされたんです。十枚のうち一枚を見いだしたら、喜ぶという。

10 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のために、神の使たちの

前に歡喜あるべし』

一人の人が本当に神に立ち帰れば、み使いたちが本当に喜ぶ。「悔改め」というのは立ち帰ります。「悔改め」という言葉はわるいですね、「申し訳なかった」という言葉もあるけれども。

「申し訳なかった」

も、いいです。立ち帰ることです。ただ、「申し訳なかった」と言って、そこでかしまつたってダメですよ。これは転回という言葉もあるんだから。転回して、そちらの方に立ち戻って、走り寄ることです。

イエスはこの序的な二つの譬話をしたあとで、「放蕩息子」の譬話をした。これはイエスの譬話の白眉はくびです。三十の譬話のどん底に置かるべき譬話です。この譬話をぬかしたら、福音はなくなってしまう。これはもうどん底ですから。今度の集会では、このどん底と最高のところと二つを中心に行っている。まず、最初の日ですから、これはどん底に立たないことには始まらない。

テイリツヒという人が「ビルダーブッフ・ゴッテス」（神の絵本）という本を書いて、その中に譬話を書いてある。なかなか素晴らしい註解です。その放蕩息子のところを読んだら、始めの方にこういうことが書いてある。

テイリツヒさんの家へ私は行って知っていますんですが、ハンブルクの神学の先生です。小さな子が五、六人いたな。私が行った時には、少し大きくなってましたが、その本を書いた時はもつと小さかった。

その小さな子どもに初めて鏡を見せたら、鏡の向こう側にいる者が何か別なものだと初めは思ったらしい。手を動かしたり、笑いかけたら、向こうも同じことをやるので、やっとならうと向こう側が自分だということが分かったという。そういう書き出しで書いてある。それは、



ちようにその子どものように、私たちは何か聖書のもを読むというと、「ああ、そういう放蕩息子がいましたか」と、別な人のように思っただけでいる。

「まさか、私はその放蕩息子ほどではない」と思っている。けれども、

「実はそれは聖書という鏡に映されているところの自分の姿である」

ということでもってティリッヒさんは展開しているわけです。誠にその通りです。

### ●体読体受

聖書はドラマであるから、劇であるから、劇中の人物は対象化したってダメだ。いつも一人称で読まなくてはいいかん。さっきの「サマリヤの女」が出てきたら――

「自分は男であって、女ではありません」

ではない――自分もまたサマリヤの女となって、このキリストに向かっている。「十字架上の盗賊」だったら、自分も盗賊となってキリストに向かっている。何でもそこに自分というものを置いて、そしてキリストに対していく。そこにあるものを、自分を一人称として、キリストを常に二人称とする。たとえば聖書に三人称のように書いてあっても、これを二人称にして読む。いつも対話篇である。プラトンの哲学のように、これは対話篇です。ディアログです。まさにこのディアログの世界、ディアロゴスの世界です。

そうすると、「放蕩息子」が出てきて、それからその「兄貴」がいて、

「さあ困ったな。どっちになろうかな」

と。どうしたらいいですか。これはどっちでもあるんです。兄貴でもあれば放蕩息子でもある。我々の中には兄貴もあれば弟もある。そういうものですよ。そういうふうに思えないうちは、聖書は分からない。聖書の扉は開かれない。

「お前はそうにしてここに読み込んでこないことには、この世界の真理は体得されぬ」

という。真理は、「分かる」ではない。理解ではない。これは体得するんだ。体で得るためには、自分がその体にならなかつたならば、体得できない。いい言葉ですよ、この漢語というものは。理を解するなんていうのではない。体でもって受けとる。体で読む。体読体受しなくては。

そしてまた、その真理が化体してこなければ。

「言が肉となった」

というのは、聖書の言が自分のうちに本当に化体してこなくては。自分が即ち聖書の言とならなくては。

「言は初めにありき」



と、キリストばかり考えてないで、これが本当に化体された言になったら、これはもう凄いことになる。そうしたら、言即行の世界に入る。言が化体されたら、言即行の世界に必ず入る。入らなければ、その言が化体したとはいえない。そうした即の世界に入ることは、今のプロテスタントはできてない。カトリックはどうだか知らんけれども。

私はカトリックでもプロテスタントでもない。我々は本当に使徒的な「ウル・エバンゲリウム」、原始の福音です。「ウル・エバンゲリウム」とは実は私が自分で造った言葉だけれども、ただドイツに一人――ちよつとそれとは別な角度ですけれども――キリストが直かに語った場所について

「そこにウル・エバンゲリウムが語られた」

というようなことが、ダイスマンという人が書いているだけです。原始の福音です。「原始福音」なんていうご連中もありますから、ごつたにされるのもちよつと困るけれども。一緒だつて何だつていいけれども、しかし、ごつたにされては困る面がある。

原始の、本当に使徒たちがキリストにぶつかっていた、その同質のものを私たちは――なにもプロテスタントやカトリックの歴史を無視するわけではないけれども――その歴史を本当に生かすためには、そこに立ち帰らなければ、原始の福音のところに立ち帰らなければ。これもやはり立ち帰りなんです。立ち帰ることが本当の前進です。根源に立ち帰ることが前進である。

### ●このとき我に反りて

11 また言いたもう『或人に二人の息子あり、<sup>12</sup> おとうと父に言う「父よ、財産のうち我が受くべき分を我にあたえよ」

申命記21章をみると、弟は兄の二分の一を受けることになってはいるんですが、

父その身代を二人に分けあたう。<sup>13</sup> 幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく

集めて、遠国にゆき、其処にて放蕩にその財産を散らせり。<sup>14</sup> ことごとく費

したる後、その国に大なる飢饉おこり、自ら乏しくなり始めたれば、<sup>15</sup> 往き

て其の地の或人に依附りしに、其の人かれを畑に遣わして豚を飼わしむ。

ユダヤでは、豚は非常にけなされた動物です。「豚は不浄な動物だ」ということはレビ記の11章にも書いてあります。

<sup>16</sup> かれ豚の食らう蝗豆にて、己が腹を充たさんと思ふ程なれど何をも与うる

人なかりき。

もう豚と同類になってしまったわけだな。

私たちの在り方が、魂が本当に平伏しであり、砕けでなければ――砕け平伏しの人には本当に立たされるのであって――砕け平伏しでなければ、本当に立つということはない。ところが、お父さんの所は嫌になってしまつて、



「俺はひとつ独立で大いにやる」

という。いいですよ、子どもは大きくなったら、みんな独立してくれなければいかんよね。「どうして独立が悪いか」

なんて。悪くはない。キリストはこの譬話のどこに重点を置いているか。どの譬話でもそうですよ、これは譬えなんですから、暗号なんだから。その中の或る一つの中心――或いは楕円形の二中心くらいな、とにかく、その中心というものがある――それを言わんがためにキリストは譬えを言っているの、譬話のすみずみまでみんな理屈をこねて、それを何か辻褃を合わせようなんていう、いわゆる「アレゴリー」なんて思っただいかん。

17 此のとき我に反りて言う「わが父の許には食物あまれる雇人いくばくぞや、然るに我は飢えてこの処に死なんとす。」

死に直面した。私たちは実は、いつでもこの死に直面している。

18 起ちて我が父にゆき「父よ、われは天に対し、

「天に対し」というのは、「神に対し」ということです。「神」という言葉を畏れるために、「天」と言うだけの話です。この「天」というのは漠然と言っているのではない。

「神の在し給うところの霊界の天」

というわけで、神を畏れている。畏れかしこんでいる。恐がるのではないですよ。畏敬とこの方がいい言葉ですね。

また汝の前に罪を犯したり。

先ず神の前に、そして汝の前に誠に間違っていたと。「罪を犯した」とは――放蕩したことが、まあ、それは罪の実だけでも――心の在り方がそもそも間違っていたことが罪の第一である。神さまの心を、父の心を心とすることができない。同じ心になれない。神の心となれないことが「罪」ですから。罪を犯したと。それからいろいろ悪いこともしたというわけだ。

19 今より汝の子と称えらるるに相應しからず、雇人の一人のごとく為し給え」と言わん」

もう自分はお父さんの子というにも値しないという、これが本当に碎けたる心ですね。

### ●絶対依存者

神の子であるところのイエス・キリストは、神の子ならば善き人なんだけれども、

「善き先生」

と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善きと言っか」

と。これも皆さん申し上げている言葉です。マルコ伝10章です。「善き」を私しない。これがイエス・キリストが自分を何者ともしていないという、本当に碎けの、或は無私の、



私の無いということです。どうか、皆さんは瞑想しながら聞いてくださいよ。瞑想しながらと言つても、何も目をつぶらなくたっていいけれども。そういう境地に自分を本当に置きながら聞いていただきたい。

自分を何かと思つてごらん下さい。そうしたら、自分を何かと思うことは罪人つみびとなんだ。どんなにそれが立派なことでありまして、何かと思うということは。

地球は太陽なくして在り得ますか。太陽がなければ、地球は在り得ない。地球の存在は絶対的に太陽に依存している。私たちは絶対に、信ずると信じないにかかわらず、万人は世界のいかなる人も神に依存している。手放して、

「俺は独立だ。俺は一人で無から生じてきた。俺は何ものにも依存してない」

という人は、何億人いても、一人もいやしない。第一、親をもっている。大自然というものに育まれている。太陽の光や空気のおかげである。いわんや、魂は神さまのおかげである。正に依存的存在です。絶対依存の存在である。そういう絶対依存の存在なんだ。「絶対否定の感情」とシュライエルマツハが言つたけれども、感情ばかりではない。絶対依存者なんだ。

私がこういう漢字を使うからといって、難しいと思つてはいかんですよ。まあ、それはなるだけ日本語のやさしい言葉を使いたいですけれども、非常に表現がいいから。私の書いたものはどうも難しいと言うんだよね。ちつとも難しくありませんよ、その心を読めば。ここに「霊的神学的信仰告白」なんていう表題を付けたものだから、難しいかと思う。これをただ「私の告白」とでもしておけばよかつたけれども。あんなものを書いたものだから、敬遠されてしまった。皆さんは本当に読んでくださいましたか。ちつとも難しくくない。難しいどころではない。これを読んでいるうちに、もう魂から火花が散るはずなんだ。私は書きながら、火花が散っているんだから。最後に、「私はこの筆を折る」と書いた。「筆を置く」なんて書かないで、「筆を折る」と書いた。

そういう絶対依存者ではないですか。だから、もう単純だ。何を考えるか。

「我思う故に我あり」

なんて大間違いだ、デカルトなんか。哲学の世界では、それはある意味において言えますよね。けれども、もう少し高次な世界にいけますと、「我思う故に我あり」なんて、そんな暢気のんきな世界ではない。だから、シュバイツァーが、

「デカルトがあんなことを言つたものだから、福音は無内容になつてしまった」

なんて、デカルトのことを悪口言つてますけれども。「我思う」ではない。神に絶対に依存しているから、「神在り」だ。いや、三人称ではなくて、「汝在り」と。

「汝、キリスト在り。故に我あり」

ということ。「汝在り。故に我在り」という世界なんだ。

「汝在り給う。故に我在り」



と。「太陽在り。故に地球あり」ということです。

仏教とかキリスト教とか言いますが、そんな分類はいらんですよ。この福音の世界は――いろんな宗教が世界にあるでしょ、インチキなものもある――けれども、とにかくそこに真理があれば、そういった真理はみんな福音の中に入ってしまう。お釈迦さんとキリストは天界で喧嘩なんか絶対にしていない。キリストの愛というのは素晴らしい広大な愛だから、天界は本当に素晴らしい和の世界だ。大和の世界だ。それだけの広大無辺なるこの福音をつかまえたなら、そんなケチな分け隔てなんかなくなってしまう。カトリックもプロテスタントもありはしない。

### ●父とキリストの姿

18 起ちて我が父にゆき「父よ、われは天に対し、また汝の前に罪を犯したり。

19 今より汝の子と称えらるるに相應しからず、雇人の一人のごとく為し給え」

と言わん」

と。この息子は、「雇人の一人のごとく為し給え」と言つて、すっかり謙つて帰つて行つた。

20 乃ち起ちて其の父のもとに往く。なお遠く隔たりたるに、父これを見て憫

み、走りゆき、其の頸を抱きて接吻せり。

こう畳みかけてキリストはこの譬を仰つた。先ず、親父は遠くから見ている、息子が裸足でボロを着てトボトボ帰つて来た。俺は待つていたんだと。それで、走り出て行つたという。レンブラントは、親父が走り出た絵を書いてないから、せつかくの大画家もこれはちよつとキリストの譬話の本当の精神をつかみそこなつた。絵は素晴らしいけれども、精神がまだちよつとずれている。この福音の世界で本当の精神をつかまえたなら、もはや問題ではない。比較を絶した世界に入れるんですから。これは本当に父は走り出て息子に近寄つて行く、そういう姿を書かなくては。無条件に喜んで、それを抱き入れているわけです。手で抱いているということは、全存在をもつて中へ入れてしまう。イエスというひとはそのようなに神の懐に入つてしまつていゝるひとなんです。

これは放蕩息子だけれども、このようにして、父のもとに帰り行く。いつも父のもとに無条件に帰り行つて、無条件にこれを受けるといふ姿が、この父とキリストの姿なんです。霊なる神、父なる神という、さきほどのヨハネ伝4章もその通り。この霊にして父なる、霊神父神なるところの神。これは絶対に離すことができない。それではお母さんはどうするか。そんなことは心配いらん。お母さんだつて何だつてみんな同じなんだ。

私たちはみな、隣人に対し、そのようにして相手をキリストの中に入れてやる。キリストが父の中にあるように。パウロが

「われキリストの中に」

と言つたのがこれですよ。「エン・クリスト」「イン・クライスト」というのは、「正に」「イン」



「中に」の世界です。しかも、父からの方が、子がトボトボ歩くよりか速いし力強い。天国は、これを私たちは烈しく求めるけれども、キリストはもつと烈しく私たちを求めていらつしやる。我々の烈しきなんていうものはたかが知れている。

烈しきで思い出すのは、ジェット機がもの凄いゴォーツと耳を聳るような音を発して離陸していく。あの音は勇ましいなと思う。重い重いあんな飛行機がもの凄い力でもってグワーツと一気に上がっていく。私はジェット機を見て、あの姿が――明日の晩がそれだけけれども――我々が本当に叫び求めているところの本当の天国追求の姿だと思った。人間の造った乗り物で最高のものは――ロケットかもしれないけれども――まあ、大変なものですよ。今のああいう文明の利器をみても、私たちの福音の霊的な世界の迫力というものは、今の文明の利器の迫力、科学の力以上のものがなかったならば、私たちはこの20世紀の危機に対して――これは文明の利器であると共に危機なんだ――この文明の利器をもつているところのこの危機に対して、太刀打ちできない。本当に勝利することができない。もはや、いい加減な信仰なんかむしろない方がいい。信仰があるなら、それならばもうこのジェット機的な、いやジェット機以上に、私たちは聖霊の翼に乗って飛翔する。

ジェット機は音を立てているけれども本当の世界は音がない。燕つばめなんかそうだ。燕は音を発しているか。あれは何も音がしない。音なしで天つ風を利用して自由自在に飛翔している。そして、燕がもの凄い勢いで飛ぶときには――この頃の飛行機はみんな燕のまねをしているんだ――翼をすぼめて、ほとんど弾丸のように飛んでいく。私は燕の走るのを見るのが一番好きだ。燕にはジェット推進機も何もありません。やつぱり、私たちの霊的な飛翔の世界は、自由自在な動きはこの燕の姿です。そして、これがヒラツと翻って飛ぶ。こんなことはジェット機にはできやしない。あれは大きな回転をしなければならぬ。自然の鳥の翼というものは実に素晴らしい。もし人間でなければ、私は鳥になりたいな。皆さんも、本当に聖霊を受けるところの、自由自在な世界に入っていく。

### ●無条件に迎えられる

それが今の、子が走り行くよりも、父が走り行く。子は本当に砕けた心で、無条件降伏で向かって行ったら――この「父」はこの場合、キリストでいい――キリストは無条件に入れる。キリストは、入れるのに何か条件をつけますか。いや実に、

「条件付けてくるやつはダメだ。なぜ、無条件で来ないか」

とキリストは言われる。あのザアカイだつて無条件でしょ。木の上に登つて、キリストとこのうのはどういふひとかと思つて、見ようとした。それをキリストは無条件に、

「私はお前の所に行つて、今日は泊まるよ」

と言う。そういう、何と言いますかね、ケチケチした気持ではない。本当に突き抜けたよいうな、この世界のその質が、皆さん、我々の魂の中にもう燃えていなくて。火花を発し



ていなくては。もつともつと、集会が喜びに溢れなければなりません。どうか、皆さん本当に、この父が喜んだように喜びにあふれてください。

「お前はすいぶん悪いことをしやがったな。すいぶん待たせやがったな」

なんて、そんなことは父は言いやしない。父は無条件に、もうそんな過去のことは全部すつとばしてしまつて、

「よく帰つてきた」

と言う。ここに、無条件に受けられるところに、無条件に迎えられるところに、本当の飛躍があるんです。

飛躍とか躍進とかいうことは、前進ではないですよ。前進にはいろいろな前進がある。日常生活では、前進も結構ですよ。しかし、前進はいいけれども、前進また前進はいいけれども、時に臨んで即ち、飛躍、躍進、突破をしなくてはいいかん。このような集会は正に、飛躍・突破の機です。今までの合理的な判断や、自分の持つているもちまえのいろんな知識、そんなものは捨てなさいよ。捨てなさいよというのは、捨てて後はどうも知らんというのではない。そんなものは一遍捨ててごらん。それが今度は本当に自由に使えることになる。それを惜しんでいるから、本当に使えないんだよと言うんです。これはあの富める青年だつて同じことです。みんな知識を惜しんで、

「私はこういう知識があるから、こういうようにして分かりたいんです」

なんて、何を言っているか。そういう分かり方では福音の世界には入らないですよ。いいですか。私はいろんな人を知ってますからね。どうか、皆さん、幼子の気持で受けとつていく。そうすると今度は、本当の靈知からして、人間のもちまえの知情意、その人の才能は自由自在に使えるから。その点は絶対に私ははつきり申します。

### ●この我が子

21子、父にいう「父よ、我は天に対し又なんじの前に罪を犯したり。今より

汝の子と称えらるるに相応しからず」<sup>22</sup>然れど父、僕どもに言う「とくとくとく

最上の衣を持ち来りて之に著せ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋をはかせよ。

<sup>23</sup>また肥えたる犢を牽ききたりて屠れ、我ら食して樂しまん。

「この我が子」という、この表現をうつつかりしてはいかん。「この我が子」というような表現にいかにか強い深い愛が表現されているか。皆さん一人ひとりに向かつて、

「この私の子」

と神は仰る。キリストはその心をもつて我々を顧みて、また呼んでいてくださる。不公平ではないですよ。

「神さまはどうも不公平なようだ。あの人にはこれだけの才能があるのに、自分にはない」



なんてね。それは神さまの深い智慧を知らない。先程も、いかなる存在も絶対に世界のものに代えることができないと申しました。私たち一人びとりは、正に自分を本当に、神が「この我が子」と言つて顧みてくださつていらつしやるということを完璧に受けとつていく。

自分の運命環境なんていうものを他の人と比較研究なんかするのではない。そんなことをしてたらダメです。みなそれぞれその人においてのつぴきならないところの事態なんです。そして、そののつぴきならない事態において、どのように神さまは自分を使おうとしていらつしやるか、展開させようとしていらつしやるか。それをいつも――神の御旨みむねということは、神の愛の御旨なんですよ――神の御旨というものを、神さまは愛していらつしやるということをお受けとつていかななくては。

「私はこんなに身体が弱いので、どうもしようがない」

と言つてくすぶつていたら、弱くなつてしまう。この弱さのうちにおいて実は強き人の知らないところの大事な役割がある。療養所のベットの上で蒲鉾のように動けない人がある。本当に心をこめて祈る祈りは、どんなに活動的な人よりも以上の力を発揮することがもちろんなある。活動できる時には活動しなさい。じつとしてゐる時にはじつとしてゐて、実はそのじつとしてゐる中に活動がある。静中の動、動中の静と申します。

そういった自在な受けとり方は、私たち東洋人は本当はできるわけなんだ。どうか、皆さんは、東洋人のこの特色――東洋といつたつて、本当は東西を融合できるんです――東西を融合できる意味において実は東洋には、この融合するところの大事な要素がある。我々の方が東西を融合することが楽なんです、西洋の人よりか。

### ●絶対的な行き詰まり

24 この我が子、死にてまた生き、失せて復得またられたり」

と。私たちは今お互いさまに、いろいろな状態にありますよ。いろんな問題や課題や行き詰まりやいろんなことがあるかもしれない。それは五十歩百歩なんだ。問題は、この放蕩息子のような絶対的な行き詰まりというものを自覚することです。実は私たちが本当に神の懐に入つていない限り、どんなに行き詰まらないように見えていても、それは実は行き詰まっている。私たちは本当は失われたる存在である。キリストなしには、失われたる存在である。けれども、本当は絶対依存させられているんです、我々は。本来、絶対依存的な存在であるということに気がつくことです。気がついていないことは実は行き詰まりをきたしていることなんです。

「わが滑りぬと言ひし時にわれ汝の懐にあり」

と詩篇の中にあるとおり、

「どう転んでも、どう滑つても、実は神さまの、あなたの御腕の中になりました」というわけです。



「どうなっても神さまの中に自分は倒れる。神さまの中に捕まえられているんだ」ということの自覚がどこから来るかという」と、

「自分を本当に何者とも思わない、何ものともしない」

ということ。いや実に、何かとするときには必ず行き詰まるということ徹底的に認識する。そして、自分を何ものかとする自我というやつを突破していく。その自我突破ということは即ち、自分を全くもう行き詰まりの存在として受けとっている。本当に絶対依存というところに来たら、これは放蕩息子と同じように、私たちは本当に帰り行くということができるわけです。その行き詰まりを本当に分からせているものがこのキリストの十字架なんです。

自分でもって本当に

「神さまと私は一つになれます」

と言える人が世界中にいるか。

「父の全き<sup>まった</sup>が如く全かれ」

という、その全きが得られるか。誰も落第だよ。パウロみたいなやつでも、

「律法の義については責むべきところなし」

というやつが、ロマ書7章で告白しているとおり、

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の体<sup>からだ</sup>より我を救わんものは誰ぞや」

と言って、彼は自分の行き詰まりを告白しているわけです。放蕩息子然たるところの、

「我は罪びとの首<sup>かしら</sup>である」

と言って告白しているわけです。モーセの十誡のどれをもってきても、それを完全に及第できないと言って告白している。

「放蕩息子」というけれども、

「では、私たち女の人はどうしますか」

なんて。それは遊女だつて何だつていいよ。何と自覚したつていいけれども、とにかく放蕩息子的な、放蕩娘的な自覚をそこにおいて本当に持つ。そうした危機的存在ですよ、本当に我々は。危機的存在です。誰でも可能性を持っている。そして、しばしばその可能性を実現してしまう。そういう情けないやつです。そんなものは、しかし、自分ではどうにもならないということ、キリストはちゃんと彼の十字架で示しているわけです。

「どうとう、その総決算は私を十字架にかけたということだ」

と言う。キリストの十字架の前にもう私たちは顔が上がらないわけです。

「十字架を仰ぐ」

なんて言うけれども本当は仰げないんです。その意味においては、十字架は仰げない。我々が十字架につけたんだから。けれども、キリストは、

「お前たちがつけたから、私はついた」



とは言わない。

「お前たちが私をつけたのではない。お前たちは、私をつけるようなお前たちだが、私は自ら十字架について、お前たちのその仕方がないものを全部ここで御破算にしてみました」

と。だから、

「彼らを赦してやってください」

と実力をもってキリストは仰った。

「彼らをどうにもならないままで赦してやってください」

と。私の過去も現在も未来も全部、十字架で赦されてある。

「赦されてあるから、ではもういいか。決して然らず」

とパウロが言っている。赦されてあるという、この愛によって私たちは次の世界に本当に入れる。

### ●キリストの砕け

キリストの砕けということは、私の「無教会神学論」のところに書いてある。「神学論」なんて書いてあるから、神学なんて思っただけはいかんですよ。

「私の言葉は、神学を破る神学である。神学を嘲るものである」と書いてある。普通の神学の概念でこれをお読みになつては困る。

我々は歴史的存在であるときつき申しました。神さまの創造から、新天新地、終末の、天地の完成に向かって進んでおられる。歴史的なある位置に我々は今立たしめられているわけです。「歴史」ということの本当の意味は、この聖書が、ユダヤ人が本当に神を相手にしたことによって初めて「歴史」ということがあった。ギリシアにも歴史はあるが、それは人間の出来事をただ記述したような歴史である。本当の意味における歴史というものは、聖書によって初めてこの人間界に自覚されたところのものです。そして、いついかなる時も神の審判はやってくる。いつ審判がくるかは分からない。各時代はこの終末に直面している。歴史の終りはいつ来るか分からない。

イエス・キリストが福音を、また使徒たちが福音を伝えたときに、

「もう、神の国は近づいてきた」

と、本当にそう思っておられた。即ち世の終末は近づいているとされた。マルコ伝13章なんかをお読みなるとよく分かる。あれはまるで、この世の終末の預言ですよ。けれども、それは二千年続いている。続けば続くほど、その終末性というものは更に深化してくる。深められてくる。終末性は深化していく。このことはあまり神学者が言わないようだけれども。延びれば延びるほど、いよいよこの終末性は深化してくる。

「世の末に信を見んや」



とキリストが言われた、そのような気持もそこから受けとることができるわけです。そういった「終末的な時」、世の終末に直面しているというこの現実が福音の場であり、福音の場の第一要素であると、私はここに書いたのはそのことです。これは時間的な角度からです。今度は、空間的な角度からいうと、人間は個ではない。みな多であり、社会というものを構成している。社会を構成しているものを一番簡単に言ったのが、「幕屋の構造」である。だ我々はみな個としてあるのではない。こうやってお互いに一つの群として、共同体としてある。「実存共同体」である。我々の個というのは共同体における個である。それが即ち福音の場の第二の要素であると、時間と空間のことをここで言ったわけです。

第三の要素として言ったのは、この福音の語られている場、本当に福音を聞く場は質的に何かというと、「砕け」です。質的には砕けでなければ福音は聞かれない。自己を立てては、福音は聞かれない。それは閉ざされる。どんなに研究したって、それは閉ざされる。これが福音の場の第三の要素であると書いてある。

そういう終末的な現実であり、また共同体的な現実であって、一人が救われることは、個が救われることは、隣人を救う責任を持っていますよ、課題を持っています。救われてノホンではない。選ばれるということは、その人が他の人に身をもつて証していくという責任を持っている。これは責任共同体ですよ、お互いに。

だから、福音の一番焦点となるとこの要素は何かというと、この砕けである。しかもその砕けは人間の単なる心の砕けでは、「砕けたる魂」くらいなことではダメなんだ。砕けたる魂は、

「いかにして本当に砕けの魂となりうるか」

ということになると、自らを砕き給うたところの、イザヤ書53章の預言を成就したイエス・キリストが、この砕けの魂として父の許に常に帰り行くものである。

「汝の御意を成させ給え」

と言って、自分を提身しているのが砕けの魂なんですよ。

「私の心ではありません。我執ではありません。この私ではありません。あなたの御意が成つてください」

と言って、自分を提身している。傍観しているのではない。提身しているんですから、本当に自分をそこに献げ砕けているこの場において、福音が告白されている。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と。この第一声の中にある砕けの音信です。「幸いなるかな、霊の貧しき者」というのは、

「本当に自分が何者でもないという砕けの魂の人にこそ天国――キリスト――汝の

中にあり」

ということ。霊が貧しくて、

「神さま、あなただけです」



と言ったキリストが本当に神という天国体を自分の中に持っていた。また、神というものの中に自分を、本当に神の懐の中に入れていた。

第三の要素と言ったこの砕けが、福音の一番の焦点の中心にあるところのものなんです。そして、この砕けに、この中心部に一体何がくるか、ということとは次の話ですよ。イエス・キリストというひとはこのようにして神の懐の中に、本当に砕けの魂として常に入っていた。もうそうでなかったら、必ず紛糾、行き詰まりで、人の間の本当の和なんてものは来やしない。和というものは本当に愛するということの、さきほどの、円が楕円に伸びていくようなものです。

●○△□×

ところが、お父さんは喜んでしまつて、

「さあ、みんなでご馳走を食べましょう」

とやっている、兄さんはどうしたかというのと、「なんだ、あれは」と。

斯て、かれら楽しみ始む。25 然るに其の兄、畑にありしが、帰りて家に近づきたるとき、音楽と舞踏との音を聞き、26 僕の一人を呼びてその何事なるかを問う。27 答えて言う「なんじの兄弟、帰りたり、その恙なきを迎えたいれば、汝の父、肥えたる犢を屠れるなり」28 兄、怒りて内に入ることを好まざりしかば、父いでて勧めしに、29 答えて父に言う「視よ、我は幾歳も、なんじに仕えて、未だ汝の命令に背きし事なきに、

私は品行方正な者でございますと。

我には小山羊一匹だに与えて友と楽しましめし事なし。

まあ、少しお父さんも悪かったかもしれないけれどもね。

30 然るに遊女らと共に、汝の身代を食い尽くしたる此の汝の子、

ここで兄貴が「この汝の子」と言う。「この私の弟」と言わないで、「この汝の子」と言つて、よそよそしく言つた。もうこの言葉に兄貴の気持が表れている。

帰り来れば、之がために肥えたる犢を屠れり」31 父いう「子よ、なんじは常

に我とともに在り、わが物は皆なんじの物なり。32 然れど此の汝の兄弟は死

にて復生き、失せて復得られたれば、我らの楽しみ喜ぶは当然なり』

と。図で表すと、お父さんは丸(○)で、兄貴は品行方正で真四角(□)、弟は悪いから三角(△)。この△(弟)が放蕩のあげくとうとうバツ点(×)になつてしまつた。それでどうにもならないから、「×」の姿で帰つてきた。そうしたら、お父さんは喜んでこの「×」を家に入れてしまつた。そして、これは丸く「○」なつた。そういうわけですね。

ところが、この「□」(兄)はゴツゴツしていて、お父さんの丸みがない。それだから、これはどうにもならん。怒つてしまつた。角張つて角がはえた。そういうわけです。これ



をまたよく我々はやるわけです。

「なんだあの野郎は」

なんてね。妬み、嫉み、眩き、これがこの四角からすぐそういう毒素が出てくる。これが人間の間を非常に毒しているわけです。

弟はマイナスからプラスに帰った。兄貴はプラスのような顔しているけれども、これはマイナスになってしまった。マイナスからプラスに変わると、プラスのようになるところからマイナスに変わる人と、この二通りある。どんなに遠くにいたっていいですよ、お父さんの気持としては。そこが切れてしまったら、それはもちろん悪い。こつち（兄）は近くにいるけれども、距離は近いけれども、実は内面的には切れている。父の心を心としないから――父の心を心とすれば、これは丸いはずなんだけれども――これは四角いんだ。

空間的にいくら近くたってダメなんだ。キリストの許に弟子たちがみんな近くにいた。一緒にご飯を食べていた。けれども、どうしても弟子たちは四角いんだよ。キリストは丸いんだけど。だから、とうとうキリストが十字架にかかったときにみんな散り散りに逃げてしまった。むしろ、始めは罰点「x」だったような遊女、マグダラのマリヤ、そんなのが帰ってきて、本当に十字架のもとに、キリストの葬りのことをした。むしろ、復活のキリストに真先にでつくわしたのは、かつて「x」だったマグダラのマリヤが一番キリストに近くなったわけだ。こんなもんですよ、人間てものはね。

私たちの中にはこの「□」もあれば、この「x」も、この「△」もある。この二人の兄弟において、人間の二つの部類がちゃんと表れている。どっちがなお悪いかというと、この「□」の方が悪いんです。学者・パリサイ人・教師・祭司なんていうのはみんなこつちの四角い方です。そいつらを相手にして、こういう話をキリストはなさった。遊女・取税人・罪びとというのはこつちの方（△）。けれども、

「遊女や取税人の方がお前たちよりか先に天国に入るよ」

とキリストは言われた。彼らはみな碎けて立ち帰ってきたからです。

「お前さんたちも、△も□も実は五十歩百歩だが、問題は碎けることだ。碎けなさい、

みんな丸くなりなさいよ」

というんです。

## ●円現

自動車の車が四角だったら走れますか。あれはみんな丸いから走れる。天体だって四角くない。みんな丸い球体をしている。本当に自由自在に動くものは、物体でも丸いものです。魂の世界も円形ということで、円現しなくてはいかん。だから、円現という言葉が私は好きなんだ。福音の世界は本当にキリストに在っては円現の世界である。キリストは神の円現体です。光体、光をもつたところの円現体である。



そこへ入っていくのには、この砕けが、イエス・キリストの十字架の砕けにおいて、私たちは本当に砕けを賜る。これは絶対に賜れるんです。

「私はどうもまだ傲慢でどうにもなりません。私はすぐ妬<sup>ねた</sup>んだり嫉<sup>そね</sup>んだりしまして」と。いいよ、そんなことはどうでも。そんなことはもうくよくよしなくたっていいから。イエス・キリストのこの砕けをいただきたいください。そうしたらば、自己突破をして――常に私たちは生まれつきのいろんなキャラクターがあるよ、いろんな癖が――けれども、その癖があるにもかかわらず、それを乗り越えていくその姿が本当に尊いんです。カントが、「生まれつき善いことができる人よりも、生まれつきどうもつまらないけれども努力してそれと戦っていく人の方が、道徳的には価値がある」

と言った。その通りです。道徳の世界ではそうです。けれども、そこには限界がある。それを本当に無限の可能性にもっていくものは福音の世界である。いかなる事態でありましても、その無限の可能性をもっているものは福音の世界です。もちろん、人間は地上においてには有限なものです。けれども、そこに無限の可能性を、無限性というものをもっているかどうか。それはもう、この福音をいただいたら、もうそれは何と言いますかね、楽しくてしょうがない、楽でしょうがない。そして、そういった妙な分け隔てがなくなる。私みたいな元来気の弱いような男はダメなんだよ、本当はね。けれども、御霊の力がきたから、

「無教会が何人いようが、どの方々がどんなに私を何と仰ろうが、どんなに排斥しようが、結構でございます」  
と。大きく包むことができる。

そういうわけでありまして、皆さんはイエス・キリストのこの十字架の砕けを、イザヤ書53章を身をもってしたところのこの十字架の砕けをいただいでいく。自分の胸に手をあててみると、いろんな癖があるでしょう。しかし、心配いりませんよ。それを何とかなくそうとしたって、いいですよ。しかし、なくすよりも、それに打ち勝ち、それを突破するところの力を、このイエス・キリストの砕けを受けとってください。必ずその砕けには力があるから。不思議な力が出てくるから。

これはこの放蕩息子の砕けたる魂を無条件に受けとってきたところの、神・キリストのこの包摂、抱き。この無条件の抱きに私たちは無条件に、いついかなる時もあるというこの大福音を受けている。もういかなる条件もいらん。運命も環境も時も所もいらん。今即刻いずこにおいてもそこに無条件にキリストの喜びに迎えられて、

「ああ、よろしい。私は何もお前をとがめない」

と言われる。いいですか。そして、その世界に入る。これは譬話三十のどん底です。これを土台にいただいたら、その先はもう楽しく力強く限りなく展開してまいります。では、今日はそこまで。

